

十三 嗜好

(一) 舞曲能樂及び小鼓の免許

九番 舞

(明治十七年十二月)

男 舞

替之形 (明治十九年一月)

早 舞

(明治十九年一月)

早 舞

替之形 (明治十九年一月)

碓 舞

(明治十九年八月)

勸進帳 舞

(明治十九年五月)

鉢木能

(明治二十年一月)

整涉樂

(明治十九年十二月)

繼重荷 舞

(明治廿一年二月)

神 歌

(明治二十年二月)

望月 舞

(明治廿一年六月)

狸々亂 (明治廿一年三月)

卒都婆小町 舞 (明治廿一年十一月)

和國、香

(明治廿一年十二月)

望月能

(明治廿二年一月)

忍辱之舞

(明治廿二年十二月)

融、十三段之舞 (明治廿三年一月)

翁、千歳

(明治廿三年十一月)

安宅、勸進帳能、同酌之掛

(明治廿四年二月)

起燈文誦

(明治廿四年五月)

角田川能

(明治廿四年五月)

道成寺誦

(明治廿四年十月)

藤戸能

(明治廿四年十二月)

葵上、梓之出 (明治廿五年一月)

船辨慶、前後之奏 (明治廿五年三月)

天鼓、弄鼓之樂 (明治廿五年五月)

道成寺能 (明治廿五年九月)

野宮、合掌留

松風、見留 (明治廿六年一月)

野守、白頭、黒頭、天地之聲

(明治廿六年四月)

花筐、大返舞入 (明治廿六年六月)

藤田

神樂笛、三輪二段神樂

卷絹 (明治廿六年八月)

游行柳能 (明治廿六年十月)

忍之舞、楠露、七踏落、盛久

小督 (明治廿六年十月)

玉取、近江八景、一字顯、寶方

石橋誦 (明治廿八年八月)

(明治廿八年七月)

木賊誦

(明治廿九年八月)

夢中之醉舞

(明治卅年三月)

羽衣、彩色之傳 (明治卅年十二月)

安宅、瀧流之曲 (明治卅年十月)

善界、黒頭 (明治卅一年九月)

石橋能 (明治卅一年一月)

俊寛能 (明治卅一年十月)

源氏供養舞入 (明治卅一年十一月) 山姥、白頭、雪月花 (明治

卅一年十二月)

老松、逗留之傳 (明治卅二年一月) 酌之舞 (明治卅二年十月)

游行柳、青柳之舞 (明治卅二年十一月) 安宅、延年之舞 (明治卅三

年二月)

絃上、師賢老十二段之式 (明治卅三年五月) 龍女之舞 (明治卅三年十一月

通小町、雨夜之傳 (明治卅三年正月十二月) 百萬、法樂之舞 (明治卅四年

二月)

景濟能 (明治卅四年三月) 能野、讀次、村雨、墨次 (明治卅四年

砧能 (明治卅五年五月) 十二月)

弄鼓出 (明治卅六年二月) 養老、小波之傳 (明治卅七年九月)

定家能 (明治卅六年十一月)

八鳥、弓流 (明治卅九年二月) 小鍛治、白頭 (明治卅九年四月)

望月、白頭 (明治卅九年五月) 清經、戀音取 (明治四十年十月)

○幸

○幸流小鼓免許

「頭取、脇能、假鼓（明治卅二年一月）」「一編鼓（明治卅六年三月）

「蟻通、卷絹、通盛小町、夕顔、雨月、歌占、東岸居士、放下僧、勤

進帳、盤渉樂（明治卅六年三月）」「別一編（明治四十一年三月）

「弄鼓、羽衣一式（大正五年十一月）

以上

（二）齋曲能樂實演に就きて

古市先生自記

○明治十九年九月十二日愛宕會幹事として素齋會を催し「礎」のツレを
勤む。

○明治二十二年十二月廿二日梅若六郎宅眞諦會納會の幹事として「自然
居士」と「山姥」。

○明治二十三年一月二十五日根岸前田子爵邸にて海人。
同年一月廿六日眞諦會初祝會「望月」。

同年四月十二日青山御所妻人喜登齋能に於て「大原御幸」の「法皇」及び
「望月」。

同年六月二十二日梅若六郎宅眞諦會にて素齋「草紙洗」、「通小町」、
仕舞「忠度」。

同年十一月十八日青山御所奏人喜豐能にて雛子「歌占」
同年十二月十三日梅若六郎宅「船辨慶」。

○明治二十四年五月三十一日梅若六郎宅稽古能「安宅」、「頼光」、
同年七月十九日梅若六郎宅稽古能「東光北」。

同年八月二十三日梅若六郎宅稽古能「唐船」。

同年九月二十日梅若六郎宅「芦刈」。

同年十二月二十日梅若六郎宅「山姥」。

○明治二十五年二月六日梅若六郎宅「亂」。

同年三月五日梅若六郎宅「盛久」、「善界」。

同年三月二十七日梅若六郎宅にて故渡邊欽一郎故田中四郎左衛門兩氏
追善能「船辨慶」。

同年四月二十四日梅若六郎宅「熊坂」。

同年六月二十六日梅若六郎宅「加茂」、「天鼓」。

同年七月十七日梅若六郎宅稽古能「七騎落」。

同年八月十四日梅若六郎宅稽古能「女郎花」、「絃上」。

同年九月二十五日梅若六郎宅裝束稽古能「安老達原」。

○明治二十六年二月五日梅若六郎宅直謠會能「八鳥」ツレ鹽谷恭次。

同年三月二十日飯田町喜多舞臺演習能「江口」ツレ梅若新太郎梅若竹世、一調濁「善知鳥」

同年四月三日梅若六郎宅能「道成寺」。

同年六月六日梅若六郎宅「天鼓弄鼓之舞」。

同年六月二十五日梅若六郎宅「花筐」。

△同年七月十四日古市公威自宅、一調「琴之段」、仕舞「土蜘蛛」。

同年八月二十七日梅若六郎宅袴能「雨月」、
「岩船」。

同年九月二十四日梅若六郎宅裝束始稽古能「龍田」。

同年十月二十二日梅若實宅第百回眞稀會能「楠露」。

○明治二十七年三月二十五日梅若六郎宅能「三輪」。

同年四月二十二日梅若六郎宅故松井定昌川崎弼兩氏追善能「松風」。

同年六月三日飯田町喜多舞臺演習能「生田敦盛」。

○明治二十八年四月二十八日梅若宅能組「草紙洗」、仕舞「山姥」。

同年七月二十八日梅若宅、囃子「弓八幡」、
「箆」、
「簀盛」、
「井

筒」、
「鶴龜」、
「富士太幡鼓」、
「遊行柳」、
「春榮」、
「白樂天

」、
「花月」、
「女郎花」、
「紅葉狩」、
「善知鳥翔入」、
「源氏供

養」、
「海人」、
「船辨慶」、
「岩船」の十八番。

同年八月二十三日梅若宅能囃子組「芭蕉」。

同年九月一日梅若宅、稽古袴能組「嵐山」、「葛城」、「融」。

同年九月廿二日野世織之丞宅歌舞臺にて、仕舞「楊貴姫」、「游行柳」、「實盛」、二曲「室君」、「芦刈」、「梅枝」ロンギ、「田村」、「雲雀山」前、「隅田川」、「草子洗」
「芭蕉」切、「東岸居士」切
「通盛」、「安宅」、「船橋」、「道明寺」、「鷓鴣」、「岩船」の十八番。

同年九月廿九日芝公園能樂堂にて於林直廣君追善能「絃上」。

同年十月廿七日野世織之丞宅歌舞臺にて、獨吟「日圓影」、「和魂」
「花筐」曲、「野宮曲」、「松風」ロンギ、「砧」、「嵐山」中入前、「兼平」中入前、「土直」、「吾濟」、「駒之段」、「勸進帳」、「實盛」語、「橋辨慶」、「杜若」、切、「天鼓」切、「春日龍神」
「猩々」。

同年十一月十七日芝公園能樂堂にて、故伯爵藤堂高潔君追善能「涌小町」。

○明治廿九年二月二日梅若宅稽古能「雜波」、「弱法師」。
同年三月一日梅若宅にて眞諦會能樂組「葵上」。

同年三月廿九日梅若宅能囃子組「角田川」。

同年五月三日梅若宅雪月花能囃子組「忠度」、「三井寺」。

同年七月五日觀世鑓之丞宅にて、鐵門同志會名譽會員として仕舞「游行柳」、「熊野」、「西行樓」、「笠之段」、「弱法師」、「藤戸」「藍染川」切、「鶴」、「照宮」、「熊坂」。

同年九月廿七日梅若宅にて囃子「老松」、「弓八幡」、「清經」、「梅枝」、「春日龍袖」。

同年十月十一日梅若宅能樂組「朝長」。

同年十二月廿日梅若宅能組「卷緋」。

○明治三十年六月廿七日梅若宅稽古能「鉢木」。

同年九月十二日梅若宅、袴能「雲林院」、「猩々」。

同年九月廿六日觀世鑓之丞宅にて名譽會員として、仕舞「熊野」、「花筐」曲、「站之段」、「松風」、「壽知鳥」、「藤戸」、「通小町「兼平」、「自然居士」切、「熊坂」。

同年十一月七日梅若宅稽古能「安宅」。

同年十二月十一日觀世鑓之丞宅にて鐵門同志會囃子「山姥」、「壽知鳥」翹入。

○明治三十一年二月六日梅若宅稽古能「羽衣」。

同年三月五日梅若宅稽古能「邯鄲」。

同年五月廿二日梅若宅にて「善知鳥」。

同年七月三日梅若宅袴能「咸陽宮」。

同年九月二日十三日梅若宅にて故伯爵中川久成君追善能「善界」。

同年十一月六日飯田町四丁目喜多六平太舞臺にて囃子「源氏供養」。

○明治三十二年一月梅若宅稽古能「老松」。

同年四月三十日梅若宅「石橋」。

同年九月十日芝公園能樂堂にて故南部利剛君、故松平容保君、故櫻井能登君追善能「仲光」。

同年十月十七日梅若竹世宅「蟬丸」。

同年十一月十七日梅若竹

同年十一月五日飯田町喜多舞臺演習能「遊行柳」。

同年十二月梅若宅にて「菊孩童」。

○明治三十三年三月四日梅若竹世宅「安宅」。

同年五月廿七日梅若宅「青盛」、「石橋」。

同年七月一日梅若宅袴能「誓願寺」、「花月」。

同年十一月十一日飯田町喜多舞臺演習能「春日龍袖」。

同年十二月十六日梅若宅「蠟政」、「通小町」同日眞野文二氏の「雲雀山」に古市先生ゐの小説。

○明治三十四年二月十日芝公園能樂堂故池田茂政君追善能「百萬」。

同年三月卅一日梅若宅「山姥」。

同年四月十五日本郷弓町自邸にて「融」、仕舞「熊坂」

同年十月廿七日梅若六郎宅「釋政」、「景清」。

○明治三十五年四月一日二日の兩日太宰府天滿宮にて菅公一千年大祭能樂奉納あり、四月一日「羽衣」、四月二日「鉢木」。

○明治三十六年二月二日本郷弓町自邸にて、素謡「七騎落」、一調「羽衣」、能「春日龍袖」、仕舞「山姥」。

同年三月廿二日飯田町喜多舞臺演習能「熊野」。

同年三月廿九日大阪博物館舞臺、博物會協贊能「雜波」。

同年四月廿七日梅若宅「竹生鳥」。

同年十一月九日梅若六郎宅「砦」。

○明治三十八年四月三日梅若宅「望月」

同年七月十六日梅若宅「羽衣」。

○明治三十九年四月三日梅若宅「小鍬治」。

同年五月十三日代々木久米民之助氏控邸 會にて「春日龍神」、「望月」、同日田沼大吉氏の「山姥」に古市先生の小鍬。

○明治四十年三月二日靖國神社能樂會「梅枝」。

同年三月十日梅若宅囃子「邯鄲」。

同年三月卅一日靖國神社能樂會にて、故正二位黒田長知君、故伯爵伊直齋君、故正三位春木義彰君、故正三位柴原和知君泊善能「石橋」

同年七月六日下谷二長町三須氏新築披露囃子會「土車」。

同年十月十七日梅若宅「清輝」。

同年十一月廿四日代々木久米民之助氏控邸にて「菊慈童」、「鍾之段」「六浦」、同日久米氏の「紅葉狩」に古市先生の小鍬。

同年十二月十五日飯田町喜多舞臺にて「邯鄲」。

○明治四十一年二月九日靖國神社能樂會「安宅」。

同年三月廿八日駒込千駄木町清國舞臺にて「翁」、同日眞野文二氏の「山姥」に古市先生の小鍬。

同年五月卅一日梅若宅にて「歌占」。

同年六月七日靖國神社能樂堂、故從一位九條道孝公追善能「望月」。

同年七月十六日靖國神社能樂堂「亂」。

同年十一月廿九日飯田町真多舞臺「熊坂」。

○明治四十二年六月六日靖國神社能樂堂にて幸流小誠宗家再興祝、能樂「翁」、囃子「班女」。

同年十一月一日三田、蜂須賀茂昭候邸にて「百萬」。

○明治四十三年三月廿七日梅若宅にて故梅若實翁追善能「定家」。

五月一日代々木久米民之助氏控邸移古能、一編「望月」。

一編「嵐山」、獨吟ツレ「狸々」。

○明治四十四年一月廿九日梅若宅能樂「鶴龜」。

同年六月廿五日犀ヶ岡茶寮にて故松井博士追善會、囃子「誓願寺」。

同年十月廿九日靖國神社能樂堂追善能「道成寺」。

同年十一月十九日代々木久米氏控邸にて「羽衣」、「唐船」、「玉篋」、「石橋」。

○明治四十五年二月十三日徳川家達公の貴族院議長官舎に於て、金剛、觀世、實生の三流謠曲會あり、觀世流よりは古市先生と堤子露出席、先生の「書盛」。

同年三月十六日 曹林院藤長官舎の餅會にて「邯鄲」。

○大正二年四月廿七日梅若宅にて「鞍馬天狗」。

同年十一月廿二日靖國神社能樂會にて「張良」。

○大正三年四月十八日大阪博物場能樂會にて「鉢鉢木」。

○大正四年四月廿四日梅若宅にて故實翁追善能「放下僧」。

同年四月廿五日梅若宅にて故實翁追善能「放下僧」。

同年五月二日飯田町喜多舞臺「疾久」。

同年五月廿五日築地同氣俱樂部能樂會にて「俊成」、「忠度」。

同年五月三十日梅若宅にて「牛田敏盛」。

○大正五年三月五日靖國神社能樂會、故久保扶幸翁追善能「角田川」

同年四月二日靖國神社能樂會、蜂須賀候爵古稱祝賀能「小鍛治」。

同年六月十一日梅若宅「雲雀山」。

同年十一月廿四日同氣俱樂部「融」。

○大正六年二月四日梅若宅「梅霞」。

同年五月十九日同氣俱樂部「歌占」。

同年五月廿七日觀世宗家舞臺にて故觀世清藤七回忌追善能「通小町」

同年六月九日梅若宅「梅枝」。

同年十月三十日同氣俱樂部「熊坂」。

同年十二月二日梅若宅にて故紅雪翁追善能「通盛」

○大正七年四月廿九日華族會館舞臺「寶盛」、「融」。

同年六月十五日同氣俱樂部にて故蜂須賀候追善能「山姥」。

同年十月五日梅若宅「清輝」

同年十二月廿四日華族會館舞臺「難波」、「亂」、「菊慈童」。

○大正八年四月十六日梅若宅二日目能樂「石橋」。

○大正十四年十一月十九日山縣公の椿山莊にて「遊行柳」。
以上

因に云ふ、先生の自肥は右にて終れるも、其の後幾多の演ありしもの如く、之を梅若舞臺のみに見るも、昭和三年二月「鉢木」、昭和四年五月「鶴龜」、昭和五年十一月「寶盛」、昭和六年故梅若實の二十三四回忌にも「寶盛」を演ぜらる、時に先生七十八歳なりき。

(三) 謡曲願引

やる方なさにかきくれて涙にむせふ計なり(芥子)
おめしそへて下されよや

(鞋)

高井 寺井

更行鐘の聲響きけは(盃)

大久保

あなたへささり此方へささり(砂時計)

古市

天にあかり神となる(鬘)

斯波

くむや心も潔き(玩具角力)

大久保

其あし一本持て來れと申候へ(大隈寫眞)

作間

ふけともふけとも更に身には寒からし(火吹竹)

高井

鍾ゆゑに逢ふ夜なり(花魁人形)

久留

頼みても頼みなきは人の心なり(五厘證券印紙)

古市

此神徳を告知らしめんと(西洋燭燭)

久留

只一さしと勤むれば(物指)

久留

實にや思ひ内にあれば色外にあらはる(小説織の病)

松井

返す返すも口をしけれ(氷砂糖)

斯波

中々の事疾く疾く下り給ふへし(快通丸)

眞野

花見の友いかてか見捨給ふへき(花かるた)

寺野

袖も天路によち昇り(風船)

松井

まれ人も御覽すらん(シカゴ博覽會)

久留

更に身には寒からし(耳袋)

久留

立舞ふべくもあらぬ身の（津崎手焙）

原野

とりて繻りし鐘なれば（古鐘石川五右衛門品）

作間

能く能く聞けば有り難や（寶丹）

石井

水に浸して涼みとる（水團扇）

古市

靜にしもはすゝめけれ（ロッキーマン山汽車）

久留

風しつまつて出つ（扇）

河合

春は千々の花盛り（花かるた）

久留

眼もくらみ心も亂れて前後を忘るゝ計なり（德利猪口）

寺野

妾も鐘をつくへきなり（ぬれからす）

久留

東に下り候へ（汽車時間表）

久留

一子と思し見そなはず（六絛二厘五毛）

久留

とくとく下り給ふへし（下劑）

久留

虚空に上らせ給ひけり（扇船玉）

田中

踏る事こそ嬉しけれ（福島中佐齋屋）

久留

あら面白の花や候（花かるた）

石井

芦刈人となりたるなり（馬車人形）

寺野

涙なからかきとゝむ（芥子）

河合

眼の前に見えたる有様（遠眼鏡）

久留

次第次第に富貴の身となりて候（寶珠貯命入）
久留米
以上

四 狂歌及び追分節

大正十年九月、北海道廳勅任技師名井九介博士が、札幌の官舎より書を内務省東京土木出張所長中原岩三郎博士に致し、書中三樂道人の雅號を以て辭世に擬して」と題する左の狂歌を書き贈らる。三樂は三道樂なり名井博士は團基と謠曲と酒を嗜まる、故に此の號ありと云ふ。

基 基なりせば待つたをしても活くべきに死ぬるばかりは手もなかり
けり

註に云ふ、これは本因坊第一世算砂の辭世の歌「基なりせば待つたを
ど打つて活くべきに死ぬる并りは手もなかりけり」を真似たるもの

謠 覺えたる謠の數の多ければ冥途の旅に退屈もなし

酒 極樂と云へば定めて酒あらん禁酒の國へ行くよりはよし

當時日下部辨二郎博士、東京市赤坂區青山に住す、一日中原博士を其の

土木出張所に訪ひ、名井博士の狂歌を見て喜び、十月三日書を名井博士に致して、左の狂歌を贈らる。

碁 切る殺す親の死にさへ違はぬ身の落着く先は地獄よりなし

箏 下手箏お経に似たるお蔭にて大手を振りて板樂に行く

酒 神酒供ふ高天の原はいざ知らず板樂國は甘茶なるらむ

十月八日、日下部博士又書を名井博士に致し報じて曰く、古市男爵近來病に臥す、頃日書を以て其の病を問ひ、且つ其の鬱を慰めんと欲し、「辭世に擬して」の書吟に附するに前記の拙吟を以てしたるに、男爵返書して曰く、余は碁と酒には關係なきも、箏曲には一句なかるべからずとて、

箏 あの世までうなりつゞけし横好きに鬼も閻魔も持て餘しけり

詞 銅羅聲は如何にお経にまごふとも迦陵頻迦の恐慌おこさん

と詠贈られたりと。又以て風流韻の奥床しさ、諧謔の間に妙味の掬すべきものあるを覺か。

古市先生又會て左の追分節あり、

米壽九十は及びもないがせめて八十鳩の杖齡八十に達すれば、宮中に於て特に鳩杖を許さる、先生之を待たる、こと久し、故に此の歌あり

而して昭和八年一月八十歳を迎へられ、所期の如く宮中杖を拜さる、先生の喜び推して知るべきなり。先生薨去の後、故舊門生胥謀り、銅像を東京帝國大學構内工學部前庭に建て、昭和十二年六月其の除幕式を行ふや、爽颯たる先生の英姿眼前に展開し、手に鳩杖を携へらるゝを見る、先生の追分節を知る者、先生の意を得たりとて、拍手之を迎へたりしと云ふ。

○
十四墓 去

(一) 葬儀當日弔詞集

歎徳章

導師大行寺三十四世權大僧正荒居養壽日忍

帝國學士院弔詞

院長松二位勳一 等理學博士櫻井鏡二

社團法人日本工學會弔詞

副理事長男爵斯波忠三郎

社團法人土木學會弔詞

會長工學博士眞田秀吉

工學院弔詞

管理長正三位勳一 等工學博士眞野文二

(以上五通は本傳記に掲載す、故に再録せず)

三井元之助氏談話筆記（昭和十年七月廿日）

私は古市さんとは、能樂のある度に面會しますが、その外には面會の機會もありませんでした。尤も私は能樂會の評議員でもありませんでしたから、その方の事に就いては相談もし、奔走もしました。

古市さんの中年時代の事業としては、政府から能樂會へ補助金を出させる事でありました。併し政府では特に能樂會へばかり補助する譯に行かぬといふので、それでは邦樂調査の名義で二十萬圓出して貰ひたいと請求し、菊池侃二代議員十等と共に運動せられたが、それが減ぜられて三萬圓となつた、而も其の三萬圓の中には能樂會の名義が脱けてゐたので、長谷場文相に迫つた結果、別途に毎年三千圓の支出を見る事になり、今日まで繼續してゐるのであります。

又古市さんの晩年の事業としては、梅若問題であります、これは梅若のみの爲なら營成は出来ないが、断界の爲に梅若を一流として立てるとい

ふ事なら乗り出さう、協同塾一致してやらうといふので、私も古市さんがやるならやらうといふ事になり、初の間はトン々々拍子にうまく行きました。が、十中の八九まで滑ぎ付けた所で、六郎の意見で中變した、但し古市さんの晩年の事業としてはこれでありませう。

古市さんは能を習はれるのに、舞臺に立つて學ばれた事は殆どなかつた坐りながら此處は斯う、あそこは斯うと聞けば、直ぐそれが出來た所は實に偉いものでありました。又誰が笛を吹かうと、小鼓をやらうと、そんな事は構はなかつた。これも實に偉い所でありました。

○ 梅若萬三郎氏談話筆記（昭和十年七月十九日）

青山御所で素人能樂のありました時、梅若新太郎の局、シテは林直麿さん、三井武之助さんの小督、古市さんの鳳凰、寶生金五郎の謠で、古市さんが場面がこちれて來て、此の末どうなるかと心配しました時、**颯**と謠はれて一轉化を見ましたなどは。その氣轉といひ實にうまいものでありました。

或る時嘗て古市さんは私に、守久は舞へないよなどと言われた事があります、それは「亂舞感能の由聞召し」といふ畏れ多い詞があるから、自分等には出来ないよと言はれました。

道成寺は五十歳以上の人にはやらせぬといふ事でありましたが、古市さんは六十三歳の時おやりになりましたと聞いて感銘致して居ります。

私が古市さんのお褒めにあつかりましたのは、蜘蛛の頼光と歌占の切の舞を致しました時、萬三郎に限ると褒められました。父實が柏崎のクセを舞ひました時、私漳が誇りましたか、此の時も良く出来たと褒められました。

父も古市さんも清又五郎さんには非常に信仰してゐられました。

父の死亡の後、古市さんはお稽古はせられませんでしたか、能樂の日は鹿橋の舞臺に來られてお書になり、いろいろお指圖を受けました。若し當日缺席者でもありますと、直ぐ代理を勤められましたのには實に感心致しました。

○

○ 梅若六郎氏談話筆記 (昭和十年五月廿五日)

古市男爵が御入門になりましたのは、明治十四年六月廿日でありまして同日松井直吉、山岡次郎、岡村輝彦、鳩山和夫、終杉浦金則の諸氏も男爵と共に御入門になり、九段下の玉泉堂にて一週一度の御稽古でありました。

父の實は「モノリ」と訓むのであります。

震災前の舞臺は舊幕臣青山下野守の御隠居が非常に能がお好きで、木曾山中から檜を取り寄せ新築したものであります。檜の心を抜きその周圍にて二尺角の種椽柱を造りました。この心を抜きますのはヒビが入るからであります、舞臺の踏板の厚さは出来上り一寸二分でありました。今戸の松屋が之を見まして、二十萬圓で請負へと云はれても、私には引受けられませんと申しました。

明治二十三年四月十二日、青山御所で御覽能がありました。一番が海人で金剛流の穂波輝麿、二番目が三井武之助(八郎右衛門の兄)の小督、三番が松井定貞の熊野、四番目は英照皇太后様附皇宮亮林直庸の大

或る時舊古市さんは私に、守久は舞へないよなどと言われた事があります、それは「亂舞感能の由聞召し」といふ畏れ多い詞があるから、自分等には出来ないよと言はれました。

道成寺は五十歳以上の人にはやらせぬといふ事でありましたが、古市さんは六十三歳の時おやりになりましたと聞いて感銘致して居ります。

私が古市さんのお褒めにあつかりましたのは、蜘蛛の頼光と歌占の切の舞を致しました時、萬三郎に限ると褒められました。父實が柏崎のクセを舞ひました時、私達が踊りましたが、此の時も良く出来たと褒められました。

父も古市さんも清又五郎さんには非常に信仰してゐられました。

父の死亡の後、古市さんはお稽古はせられませんでした。能樂の日には廊橋の舞臺に來られてお舞になり、いろいろお指圖を受けました。

若し當日缺席者でもありますと、直ぐ代理を勤められましたのには實に感心致しました。

○

梅若六郎氏談話筆記 (昭和十年五月廿五日)

古市男爵が御入門になりましたのは、明治十四年六月廿日でありまして同日松井直吉、山岡次郎、岡村輝彦、鳩山和夫、~~松~~杉浦金則の諸氏も男爵と共に御入門になり、九段下の玉泉堂にて一週一度の御稽古でありました。

父の實は「モノリ」と訓むのであります。

震災前の舞臺は舊幕臣青山下野守の御隠居が非常に能がお好きで、木曾山中から檜を取り寄せ新築したものであります。檜の心を抜きその周囲にて二尺角の種株~~を~~柱を造りました。この心を抜きますのはヒビが入るからであります、舞臺の踏板の厚さは出来上り一寸二分でありました。今戸の松屋が之を見まして、二十萬圓で請負へと云はれても、私には引受けられませんと申しました。

明治二十三年四月十二日、青山御所で御覽能がありました。一番が海人で金剛流の穂波輝麿、二番目が三井武之助(八郎右衛門の兄)の小督、三番が松井定貞の熊野、四番目は英照皇太后様附皇宮亮林直庸の大

原御幸、五番目は寶生流前田利鬯の鐵輪、止めは古市男爵の望月、別にお好みとして寶の寶盛、寶生九郎の春日龍袖でありました。

「この林直廣さんの大原御幸はねばりにねばつて捗りませんので、男爵が氣を利かせて、サラサラと膝けれましたので調子善く濟みました。善善涌の人には出来ない事で、私共は實に感心いたしました」(萬三郎 話)

古市男のお好きなのは、百萬、三井幸、柏崎等で、お亡くなりになります。最後の舞は、寶盛でありました。その前に角田川を舞はれました。

これは震災前の舞臺であり、此の角田川の翔りの中頃の所で三四尺向つて右の方へ、即ち男爵から申せば左の方へよろけられました。すんでから後で申されますには、もう自分も能が出来ないと云はれました。併し震災後の今の舞臺で、昭和三年二月十二日、鉢木シテ、(ワキは久米民之助氏)昭和四年五月十二日、鶴龜シテ、昭和五年十一月二日、寶盛シテをお勤めになり、昭和六年父寶の二十三年忌に寶盛をお願ひ致しました。

或る時男爵が寶盛をやられる爲に、樂屋で私(六郎)が赤地の錦の直垂を出して置きましたところ、之を見られてそれでは此の装束を替けて

雙への方を勤めさして貰ふと云はれました、大概の人は黙つて綾東を着けられるのですが、男爵は誠に善理の堅いお方であると感心しました。或る時男爵が私に申されたことがあります。「能をやつてゐると、忙がしいのも忘れ、頭が一變して何事もよく出来る」と。それ程男爵は能がお好きでありました。

地方へお出懸けになりますと、能のお相手がありませんから、獨吟仕舞を御發明になりました。それは寶盛、鉢ノ木、頼政などの三四番であります。この頼政は仕舞には無かつたものであります、實が始めて英照皇太后様よりのお好みで仕舞を作つたものであります。

古市男が梅若流を一流として立てやうと努力せられ、男爵の御注意で改良せられました、新しい言葉が随分あります、又能の小書きを改正せられましたものが五六番あります、又讀み方は同じでも文字を改正せられましたものが二三番あります。

大正十年、工業倶楽部で全部弟子を集めて梅若流を一流として立てたものかどうかと協議があり、清浦奎吾さんが座長で、古市男爵も御出席になり、全會一致で一流を立てることになりました。其の後私は家元を兄に譲り、兄と同道で古市男爵をお訪ねして此の事をお話致しますと、

男爵は、志は感服するが、元來斯様なことは技術の問題でないから自分は大不賛成だと申されました。兄は前に座りながら之れを聞いて黙つて居りました。

梅若流の謡ひの本を作るにも常に古市男の教へを受けまして、それが今茲昭和十年二月に出来上りました。昨年男爵のお亡くなりになりました時、弔ひの謡を勤めました。私（梅若六郎）の江口、鋳之丞の融、萬三郎の江口でありました。

明治二十六年六月六日、芝公園の能樂堂で華族並に高等官の獻能がありました。英照皇太后様が行幸あらせられました。松平忠恕の須磨源氏穂波經摩の満仲、前田利彦の三山、林直庸の角田川、飯田巽の重盛、古市男爵の天鼓（弄鼓の舞）、中川久成の雛子東北、實の絃上、九郎の野守でありました。

之は別なお話です。ありますが、古市男が御幼年の時、御自宅の床の間の福祿壽の掛物を見て、その頭が長過ぎるから切つてやれと、墨を塗つて切られたことを會てお話になりました。

男爵が能を舞はれますのに、髭が多く御座いましたから、手拭で髭を頭結びに結び付け、面を冠られるのが常でありましたが、此の次に道成寺

をやる時はこの髭を落すと父に云はれました。然し愈々當日となりますと、どうも落せないと言はれて矢張り手拭で巻いて道成寺を勤められました。

會て春日龍神をおやりになりました時、玄人の増見仙太郎（金春流家元宗右衛門の父）の太鼓が間違つたのを、それに合せて調子を取られましたのには、實に感服致しました。それは「テレテレ龍女」といふ龍女が立ち舞ふ波瀾の袖

と云ふ六夕ヶ敷い處で、よく間違ひ易いのを、男爵は謠ひを之に合せられました。能も非常にお上手でありましたが、謠ひも亦實にお上手でありました。能の方では、奥傳の奥傳なる三老女（檜、垣、姥、捨、關寺）を除くの外は皆済まされました。

野村靖子爵家と私と梅若家とは同じ橘家の末孫でありますから、野村子爵の文章で「様」の謠ひが出来上り、節と間は實が附けました。いよいよ本を作りますとき、古市男爵に御相談致しましたところ、御親切な御手紙を下さいました。

故男爵様御婚儀の節、洋服にては面白くないから、麻袴で式をなさる

とて、亡父より袴をお借りになり、當日御式を遊ばされし由、奥様は地
赤白にて綿帽子の由、父より承つて居ります。

昭和六年十一月 龜之（現在景英と改名）婚禮の節は御迷惑ながら月下
下水人を願上げました所、御承知下さいまして、當日は沖も有り難き御
言葉を下され嬉しく存じて居ります。

○
（三）座談會 筆記錄

故古市男爵記念事業座談會（第一回）

昭和十年五月二日木曜日東京市丸ノ内日本工業俱樂部に於て故古市男爵
記念事業に關する第一回の座談會を開催す。

出席者（いろは順）

中山秀三郎君

服部漸君

故古市男爵記念事業座談會 (第二回)

昭和十年五月八日(水曜日)東京市麴町區丸ノ内日本工業俱樂部に於て第二回故古市男爵記念事業座談會を開催す。

出席者(いろは順)

- | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 名 | 松 | 中 | 中 | 高 | 加 | 觀 | 本 | 丹 | 眞 |
| 井 | 田 | 原 | 川 | 橋 | 茂 | 世 | 間 | 羽 | 野 |
| 九 | 竹 | 岩 | 吉 | 義 | 正 | 鐵 | 廣 | 鋤 | 文 |
| 介 | 太 | 三 | 造 | 雄 | 雄 | 丞 | 清 | 助 | 二 |
| 君 | 郎 | 郎 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 | 君 |

四年から十九年まで、水道に御關係なかつたのですか、古市さんは：
：：：對に對し野村君の一向聽かなかつたと云ふ丈にては物足りなく
思ひ

水道を始める時から關係されたので即ち二十四年秋に工事長になられ
た。

とでも申しましたか？

第 頁

岡田 古市さんの能をおやりになつたのは、仁川ですか、京城ですか。

第 頁

岡田 大連ではやらなかつたのですか。何でも大連で謠をうたふ者がな
くつて自分がおうたひになつた。

右兩項共小生にあらず、本間君との誤認と思考す。尤も 頁の分に
は次に「本間 京城で：：：」とあれども、是は前項の引續かと思想
像す。

一〇一九一八

岡 田 竹 五 郎

杉山直次郎君

午前十一時四十分開會

眞野座長 御挨拶を申し上げます。今日は御多忙の所をわざわざお出を戴きまして誠に本間に取りまして幸に存じます、厚く御禮を申し上げますこの編纂の方は中山工學博士が委員長であられるのですが、今日はちよつと腹工合の都合で午前は出られないで、午後から出ると云ふことでございますので、本間君に座長を願はうかと、思つたのですが、本間君は話されることが多いらしいので、~~大體~~不肖私が中山君に代つて座長を勤めます。大體のことは本間君からお話をお聞き願ひたいと思ひます。

本間 折角座長からの御命令でございますが、よく私共調べて見ましたけれども、どうも古市さんと云ふ人は書いたものをさつぱり残して置かない人で、昨日行つて何かあるかと調べましたが、妻君のお話と調べて居る結果では、明治八年に洋行をなすつた、それから十二年に歸つて謠を始めたやうに思ふのですが、高橋さん、その邊お分りですか。

觀世 お稽古は明治初年でございませう。それから洋行あそばしたのでせう。

本間 さうすると洋行前ですね、妻君がお嫁に來られたのが十七年ださうです。實さんが出稽古に行つて、稽古をして居られた。斯う云ふことを妻君がお話になつた、始めるのは明治初年から始めて居つたのでせう。

觀世 柳橋の何とか云ふ所で團さんなどのお集りで……。

本間 團さんなんかと一緒に……。

觀世 お始めになつたのは、明治初年でございます。

高橋 私は故團男の謠に關する事實を調べる爲め梅若六郎方に参りまして、古市さんが梅若翁に入門なされた時の事を知りましたが、梅若實翁がどう云ふ譯か入門帳と云ふべき處を門入帳と書いて置かれました。

本間 昔は門入と云つたものと見えて、私共の方でも、免狀の古いのは門入となつて居ります。

高橋 その門入帳が今でもちやんと六郎の所に残つて居ります。明治十三年に益田孝、三井八郎次郎が入門して居る。明治十四年に古市公威

鳩山和夫、金子堅太郎の名が書いてある、十六年に團琢磨、十七年に馬越恭平が書いてある、さて古市さんのお父さんは、姫路藩のお留守居役で、藤し進と申されました、お留守居役と云ふものは會計のことを掌つたものと見えて派手な交際をする方であつた。夫れ故古市さんは、能樂に就て素養があつたのだらうと思ひます。門入帳には明治十四年と書いてあつたと記憶して居りますが、門入帳を御覽になると日付までちゃんと書いてあらうと思はれます。

本間 明治初年のお父さんが在世の時分、邸に誦をするものが居たから、多少の稽古は受けて居つたかも知れませぬね。
高橋 さうです。

名井 我々は實と云つて居るが古市さんは實ぢやない實だと言つて居られる、どつちでも宜いが誰も實と云つて居るが……。

觀世 我々は實と言つて居ります。兎に角梅若の親爺は毎日のこと又人のこと迄細かに書いて残してありますから、多分あれは焼けない譯ですから、あれを見れば随分細かい事が分ると思ひます。

本間 三十年から能樂會に關係して居る。

眞野 飯田巽、死んだ、巽君から譲り受けて、明治二十九年からの能樂

會史がある。

本間 高橋さんは御承知ないだらうか、青山御所の裏覽能を勤めた、それは何でしたか。

高橋 それでは一つ前座を勤めやうと思ひますが宜しうございますか。
眞野座長 どうぞ……。

高橋 甚だ僭越で御座いますがちよつと思ひ出したことをお先に申上げやうと思ひます。

古市さんが明治十四年に梅若に御入門になりましたことは實翁が直筆の門入帳に書いてありますが、其の年に金子堅太郎さんも入門して居ります、これは金子さんから聞いた話ですが、明治十四年頃は西南戦争が濟んだばかりで、未だ能樂の起つて來る機運に達せず、岩倉公の御盡力で芝には已に能樂堂が出來て居りましたから、謡曲を稽古する人などは至つて少ない、そこで梅若實は非常なる窮境に立ち、淺草藏前に舞臺を建ては建てたれども、それを維持して行くことが出來ないので、一部を借家にして、それで生活を立て、行かうと云ふ間際に達した、ところが或時實が金子さんに向つて「私は大道で謡を謡つて居りまして、自分の舞臺を借家にしたくありませんから、どう

か致して之を喰ひ止めたいと思ひます」と言つてしみ々々嘆息するのを金子さんが非常に感じて「お前一箇月幾らあれば暮しが立つて行くのか」と云ふと「三十圓あればやつて行けます」「それならば一箇月一圓の弟子も三十人取れば暮して行けるぢやないか」と申しますと「その通りでございます」「それならば俺が友達と申合せて弟子を寄せやうぢやないか」。斯う云ふことで古市さんなどにも入門を願つたのぢやないかと思ひますがどうでございますう。

本間 稽古は早くやつて居つて、その時に入門して一圓出して稽古するやうになつた譯ですね。

高橋 九段段下に玉泉堂と云つて今でも文房具をやつて居る家があるが鹿橋まではなかな々々が稽古に來ないから、此玉泉堂の二階を借りて稽古を始めた。精尤も金子さんは自宅へ來て貰つたと言つて居られました、さういふことで弟子が段々出來て來たやうな昔の事を今の梅若の若い者に聽かして置きたいと金子さんは頻りに言つて居られましたそれから一昨年故團男の傳記の材料を、古市さんの處へ聽きに參つた時能樂に關して、色々の話がありました、先づその時の談話を一つ申上げて置きます。古市家は御維新前後にかけて姫路藩江戸御留守

居役を勤めて居られたが、古市さんもあの通りでございましたが、お祖父さんは非常に風采の立派な人で、如何にも大藩の家老であるが如く見えた、そして、御留守居役と云ふものは、倉屋敷其他藩の財政方面に關係して居つたので、大町人との交際が多く、その時分の酒井家ですから、大變な勢で非常に派手な交際をなさつた、それに九代目團十郎がお最負で、屢々彼を招かる、度に彼はその風采を見て、自分の大石藏之助をやるのには之をモデルに取るのが好いと思ひ付き、團十郎はこれより藤之助進の平常の癖から着物の着こなし一切のことを研究した。是は古市さんが、小室信夫と云ふ團十郎の經濟の世話をして井上馨侯に紹介した人より聽かれた話であるさうだ。尚ほ團十郎の弟子に、市川新藏と云ふのがありましたが、この新藏が、團十郎は古市さんのお父さんを、モデルにして大石藏之助を勤めたと云ふことを、光妙寺三郎さんに話したさうで、古市さんは光妙寺三郎さんから、其の話を又聽きしたと云ふことであります。大石藏之助は五萬三千石、淺野家の城代家老、こちらは十五萬石酒井家の御留守居役と云ふのですから、丁度相當の格式で團十郎もうまい所に目を着けたものだが、さう思ふと團十郎の大石藏之助は、古市さんの面影があつたやうに思ふ

御承知の通り古市さんは威あつて猛けからずと云ふ實に立派な風采の人で、梅若の舞臺で實盛を素面でおやりになつた時など。如何にも實

盛が出て來たやうな感じが起つた。

髷があつたらしい。
お申いと來た居る。

本間高橋

髷が白いと来て居る。

それから古市さんの能樂に於ける御鍛練に付て益田孝翁は林直庸

と云ふ宮内省に奉仕した人から聽かれたさうだが、古市さんは梅若實に付て非常に鍛練したもので能樂の技藝は拔群に優れた人であつた。

英照皇太后陛下は能樂に付御趣味が深く、能く役者の藝力を御見分けになつたが、大抵の能樂者は幕を揚げてずつと出て來た時に、是ほどの位の力があると云ふことを、直ぐ御鑑識あらせられたさうだ、處で古市さんが青山御所で能を勤められたのが明治二十三年四月十二日に望月、同年の十一月十八日に歌占の雛子であつたが、其の望月で揚幕を出ると、

英照皇太后様は側近者に向つて「あれは素人ではないぞ」と仰せられたと林直庸さんのお話である、それから古市さんがもう一つ

英照皇太后様の台覽に供したのは、芝の能樂堂で明治二十六年六月六日、天鼓、弄鼓と云ふ小書き付のある能であるが、古市さんの所に殘つて居る番組に依ると天鼓として古市公威シテ、鈴木誠ワキ、雛子

の方では津村又太郎須錦吾大鼓小鼓、大鼓増見仙太郎、笛一増要三郎
間山本東次郎と云ふことになつて居ります。

眞野座長 その時の古市さんの樂が非常によく出來たと云ふ話を聽きま
したが……。

本間 大鼓は増見ですか。

高橋 大鼓は増見でせう。その時の能樂界を見ると九郎も居り實も居り
今日から回顧すれば實に黄金時代です。そして上には 英照皇太后様
が御覽あそばされて居たのですから……。

本間 實さんと實生九郎と云ふ人は、素人のものであらうと、何であら
うと、地裏に居つてすつかり見たものです。

高橋 兎に角三回あつた。

本間 青山の御所の能の時、私は林直庸と云ふ人を知らなかつたが、林
直庸が大原御幸をやつた、その法皇を古市さんがやつた。

高橋 それは番組にある。

本間 望月をやつた、是は明治二十三年の四月十二日、あなたの御話と
違はない、それから望月の時にも津村と三須錦吾が小鼓笛、一増要三
郎、増見仙太郎は大鼓を勤めて居る。

高橋 傳記を書くならば、番組を録載させた方が宜い、古市さんの所にその時のものがあるから。

本間 古市さんの所には刷物はない、書いたものはありますが。

高橋 書いたものでしたか、何でしたか、借りて見たいことがあります。

本間 書いたものはあります、必要な所だけ寫しましたが、寫真版にして撮りたいから、撮らせてくれといふことを、未亡人に頼みました
名井 青山の望月の時に、六郎が子方を勤められたとある、先生の望月を見た時に六郎が子方であつた、そんなものでせうね。
高橋 そんなものです。

本間 明治十四年十一月十九日に、山縣公の屋敷で御能があつた、その時に遊行柳を古市さんが舞つた。十七年に妻君が來たのだから、妻君が來る前です。その時分遊行柳を舞へる位だつたから、前にやつて居つたのでせう。

高橋 それから私は古市さんから色々と梅若實の藝風を聽いて居りますが、其の中一つ二つお話し致しますと、實と云ふ人は清又五郎と云ふ御維新前、家柄はそれ程良くなかつたが、藝風に優れた人に親爺して

居つて、この人の藝風を實先生は、古市さんに話されたさうだ、此清又五郎と云ふ人は、非常に藝の達者な人であり、且如何にも錆のある遊い藝であつた、殊に弱法師といふやうなものは、最も得意で實に何とも旨へない、技神に入ると云ふべき處があつて、實の弱法師は清又五郎のを其の儘取つて居つた、古市さんもそれを聞かされて大に得る所があつたのだらうと思ふ。清又五郎と云ふ人は舞を舞ふ時に袴の前の帯際の處を持つ癖があつた、ところが實も亦これを持つ癖がある、御承知かも知れませんが、古市さんも同じくこれをやつたやうに思ふのです。

眞野座長 舞仕舞の時ですね。

高橋 囃子とか仕舞の時です。

観世 ちよつとお持もちちもちになりますね。

高橋 どうも私は清から傳來したのだらうと思ふ。

観世 ちよつと持つておやりになります。

眞野座長 始終ぢやないが、時々やります。

本間 私は観世流の特長かと思つて居つたが、清又五郎から来たものかね。

高橋 清又五郎から来たのです。

本間 この頃は觀世流でもやる、一般にやるやうですね。

高橋 私から申上げることとは大抵こんなことですが、古市さんから他に少々聞いた話がありますから、御参考の爲に後に申上げませう。

眞野座長 大變面白うございました、それではこゝで御休憩を願ひまして御食事を願ひます。

午後零時二十五分 休憩

午後一時七分 再開

午後出席者 中山秀三郎君

眞野座長 それでは午前に引續いて開會致します、高橋さんに午前の續きをお願いしたいのですが、觀世先生は御用があるさうですから、先に何かお話になることがございましたら……。

觀世 私は別にお話することはございませぬ、伺ふだけでございます。
高橋 お稽古はあなたの方で……。

観世 お稽古は父が申上げることがございますが、私はてんでございませぬ、たつた一度ありますが、それではそのことを申上げます。お病氣におなりになる二三年前でございましたか、宅の皆さん、紳士の方お能の時に、是非古市さんをお願いして、宅の舞臺でも一度舞つて戴きたいと願ひしたことがございました。それちや一つ景清をやつて見やう。今度は小返しと云ふ小書にして、何時も君の方は坐つて型をするのを立つてやりたい、それにはまだ型を知らぬから、教へてくれと言つて、私共の所へわざわざお見えになつたことがございます。古市さんのお目から見れば小僧みたいの者に向つて、さう云ふお言葉で實は私もその型は勤めたことがございませんから、「親爺の書き物をそつくり寫して差上げますから、御自身に御研究を願ひます」と言つて書いて差上げたことがございました「いや書き物を見たゞけではないかぬからやはり一遍あしらつてやゝらしくしてくれ」と云ふ仰せなので、據ん所なくおあしらひ申上げて、始めから終りまで一通りあそばしました。最初に口でお話し申上げて、それからちやんと本式にあそばしたことがございました。あとでどつか悪い所を直してくれと云ふことで、どうも私にはちよつと分りませんし、申上げるのも何だか釋迦に

説法するやうですが、折角の御熱心ですから、自分の氣付いた所だけ申上げて、非常に喜んでお受け下さいました。さうして當日それでお勤めになりました、我々のやうな青二才の者に向つても、藝術に對しては、それ程御熱心でおありになつたと云ふことをちよつと申上げておきます。

名井 梅若の舞臺は何年頃に出来たか。

朝世 廣橋の青山様の舞臺です、御維新の時に何でもお出来になつて、確かまだ舞臺開きをしたかどうか分らない中に御維新の時にお賣りになつたんぢやないでせうか、道具屋の手に渡つた。

名井 二十五兩とか何とか新聞に出て居つたが……。

朝世 それでも大騒ぎをして借金をして、梅若の父が買つたんです。

本間 先生は今日お變備しがあるさうですからお構ひなくどうぞ……。
朝世 それではお先へ失禮いたします。

(朝世鐵之丞君退席)

眞野 町長 それでは高橋さんにお願ひ致します。

高橋 私は古市さんから色々面白い話を聞いて居つたのだが今は大方忘れてしまつた。

其中で能樂の翁は古來神秘的のものとして之を勤める前には精神潔齋するのを常としたが、近頃はそれが頗る簡略になつた、實から私古市さんは斬り云ふ話を聞いた、御維新前盛將軍家の舞臺で能のあつた時正月の事だ、觀世大夫が翁を舞ひ梅若はツレの家なれば、千歳を勤めたのである、それで實はその朝早く千代田城に行つて居ると、袴束の中に腹巻を入れ忘れたことを、實の夫人が後で氣が付き、是は大變だと言つた所で、當時のことですから人を馳らすより外に仕方がないので腹巻を使ひの者に持たして、お城へ届けた。實の方では腹巻がやつと間に合つたので、之をしめて舞臺に立つて千歳を舞ふた、ところがその時大切な拍手を踏む處で、穿いて居た大口に足がひつかつて、拍子を踏むことが出来なかつた、そこで實は謹慎を表して届んだやうな形で誤魔化して仕舞つたものゝ、觀世大夫より後で、どんな目玉を食ふか分らぬので、實はびく々々として能が濟んでから、觀世大夫の所へお詫に行つた。すると大口を踏み外したことは一向に知らず、あそこは謹慎のやうに見れて非常に良かったと言つて褒められた。實はやれやれと家に歸つて段々聞いて見ると、夫人が言ふには、私は折柄月經を見て居つたので、私の手に觸れたものを持つて行つて、とんだこと

かなければ宜いかと思つたが、最早間に合はなかつたから、その儘にして居つたと云ふことなので、實はどうも恐ろしいものだど話されたそれから 英照皇太后様は能樂のお話を古市さんが林直庸と云ふ人から聞いたとて話されたことがあります。 英照皇太后様は能樂に就て餘

は非常に御浩詣が深くあらせられ、鑑賞家とも申すのでありませうか宮中で御能を催す時分には、番組を御自身で作らせられ、之を一番にもして之を二番にせよと仰せられたのみならず、何の狂言をその間に扱もむと云ふことまでも、御自身で御指圖なすつた。林直庸と云ふ人が英照皇太后様にお附して居つて、さう云ふ御用を承つて、お口から

お話があると、それを書き取るやうになつて居つたが、或時狂言はサククワにするかと宜いと仰しやつた。ところがサククワと云ふ狂言はどんな狂言か林直庸は知らなかつたので、サククワとはどうも云ふ狂言でございませうかと申上げると、 皇太后様はお笑になつて、サククワ

とは咲く花と書くと仰せられたさうだ。それから梅若實が、自分の子供に對する藝道の教授に就いて、何時か古市さんからお聞きしたことがあつた。それは萬三郎と六郎とは丁度年が十違ふ、十違ふから萬三郎が三十の時には、六郎は二十である、丁度その頃であつたでせう、

藝と云ふものは或程度の所に達すると、後は一々手を取つて教へなくとも、自分で研究して自得することが出来る、即ち自分の工夫に依つて其の個性を發揮することが出来る、それで萬三郎にはもう藝を教へませぬ、あれは私が是れまで教へてしまつたもので、自分で獨習してあれが私の年になれば、私よりも上手になります。六郎はまだ是からですと言はれ、たが六郎は末子で可愛い、萬三郎には叩き込んで教へたが、六郎には厳格な鞭で打つと云ふやうな教へ方はしなかつた、萬三郎にはうんと力が入つて居ると云ふことを言つて居つたと云ふことです。

本間 有難うございました。

名井 古市さんの翁で、眞野さんが千歳をやられて居つたと言つて居つたが、あの話を附けて置くと言ひな……。

本間 私が古市さんから聞いたのに、能樂社と云ふものを宮内省の肝煎で拵へた時、古市さんなどもそれに關係して居るが、これはどういふ目的であつたかと云ふに、能役者が普通の藝人扱ひをされるのは面白くない、今まではずっと宮中及び各大名の禮樂になつて居つたのであるから、これを眞實な藝術として置くのには、芝居などの役者と同じ

やうな地位にして置いてはいかぬと云ふので、その頃豫算を積つて見て、二十萬圓あれば日本の能役者全部をその利子で養つて行けると云ふ計算で、極く程度の低い時分のことですから……、それならば二十萬圓の金を募らうと云ふことになり、宮内省でお骨折り下さつて、主に岩倉さん、九條さん、穂積さんなどが非常に苦心慘愴して能樂社と云ふものを設立して金を集めた。それが七萬圓ばかり集まつて舞臺を紅葉館の傍に建て、行幸啓を賜はつた、それまでは行幸は餘りなかつたが、行啓は數度あつて、英照皇太后様とその時の 皇后陛下後の照憲皇太后様が御覽遊ばされた。この能樂社の出來たが明治十七年でまあそれからいろいろのことがあるが、明治三十年頃には古市さんと飯田巽さんが今で云へば常務理事と云ふやうな役に就て居られた。所が幾らやつても收支償はない、集まつた金は段々減るばかりで、金が集まらぬ、それでどうしたものであらう、これまでやつて來たのだからと云ふ時に。それではこの偉い能樂を亡さぬやうにするには雅樂的のものにして、帝室の技藝にして貰はうぢやないかと、古市さん飯田さんが話し合つて、當時の侍從長の徳大寺實則と云ふ人に諮つてどうか宮内省の方の同意を求めて欲しいと言つた。そこで徳大寺さん

が 明治天皇に申上げた 明治天皇は外國から國賓が漸見えたる時に見せる藝で何か能樂の外に見せる藝があるかと御下問になつたので、能樂より外に見せてお慰めすると云ふ藝はありませぬと申上げた、所が席に土方伯が居られて、日本の芝居を改良したら見せられるだらうと言はれた。土方伯は非常な芝居最負の人である。併し古市さんにしても、飯田さんにしても。能樂を芝居なんかと比較出来るものぢやなし能樂以外に國賓に見せるものはないと云ふ議論で、兩立した譯。それぢや一つ外國に行つて見て來やうと云ふことになり、三萬圓の費用で土方伯が外國を一巡りして歸つて、どうも芝居を改良しても満足に行かぬ、成程能樂と云ふものは品の良いものだといふことになつた、併し之を愈帝室技藝にしたならば非常に窮屈になるかどうしたものでらうといふ時に初めて明治天皇から行幸一度行啓一度として其の度毎に一千圓宛を下され、その外に實會員を募るといふことにしてはといふ御内意を承り、それではと云ふので、行幸能一度、行啓能一度即ち年二度と云ふものを初めて拵へてやつた、けれどもまだ維新の遺持が出来ぬ、そこで能舞臺は靖國神社に寄附して、九段の能樂堂に行幸行啓を載いて、そして能樂と云ふものを維持しやうと云ふことになつた

その時の古市さんや飯田さんの苦心は大變なものであつて、又この道に取つて古市さんの功勞も大であつたことを立證するものである。そして蜂須智候が會長で、古市さんが副會長ですつとやつて來たが、梅若問題が起つて決裂して離してしまつた。その後かう云ふことがある。丁度或時九段の相撲場に來て居ると、蜂須智さんが亡くなられ、徳川公爵が能樂會の會長になられて居つたが、徳川公爵が私に、本間あそこに市古市が居るから、來るやうに言へと云ふことで、私が古市さんの所へ行くと、俺は能樂會を結めたから何か言はれるといけないから宜しく言つて呉れ、行かないからと言つて終に行かなかつた。徳川公爵は急用があるのに、古市が來ないのはどうしたのだらうと言はれたが、古市さんの歸るのを待つて擱まへて歸られたやうであつたが、と云ふ云ふこともあつた。こんなこともあつた、眞野さんのシテで、善知鳥の囃子を梅若の舞臺でする時に、久米民之助が大鼓、古市さんが小鼓、笛は一増要三郎であつた。所が善知鳥の囃子の一番難しい所は羽追込む型をやる所である、それから謡に移る所が一番面倒である、でそれを何度もやつて見て、漸くシテの方も囃子の方も打合せが出來たので、やつたが、誰がやり損ふか分らぬが、鬼に角シテは別に何で

もなかつた、所が囃子の方で、古市さんは、おい久米間違つたと鼓を打ち乍らやつた、すると久米は俺が間違つたのではない、君が間違つたのだ、いや貴様だ、いやまうぢやない君だ、といふ譯で、そんなことでは俺はいやだと言つて、古市さんは鼓を棄て、奥へ引込んだ、すると久米も俺も嫌だと言つて鼓を棄て、入る、すると見物人の方ではパチパチ手を轟叩く、俺は堪らんから飛び込んで行つて眞野君があゝして待つて居る、だから濟んでから議論をしなさい。あの通り手を叩いて笑ふし堪らんからと言ふと、久米どうかと言ふとやりませう。それぢややらうといふことになつて、中途からやり直してまあ無事に濟んだ、眞野君は喧嘩の融和が出来て出て来るまで、舞臺で立往生をして居つた譯である。まあ濟んで奥に行つて喧嘩するかといふと笑つてひどい目に遭はせたといふことで濟んだ。こんなことはもう殆どないことで、會ふ毎にこの話が出ました。

それから餘程前であるが、招魂社で今の皇太后陛下の御父様の九條公の追善の能をしたことがある、その時は今の皇太后陛下、その時はまだ大正天皇が皇太子様時代の妃殿下であられたが行啓遊ばされて、その時に我々に賜り物があつた、その時舞つたのが、飯田巽が三輪、

古市さんが遊行柳、私と中野岩太の二人が小袖會我であつた、あとで賜り物の金の處分方を相談する爲に紅葉館へ行つて酒を飲みながら相談して、載いた金は能樂會に寄附しやうぢやないかといふことになり又別に載いた品物は銘々で分けたが、尙ほその時の雛子方も招んだ所が飯田巽が杉山と云ふ笛方に向つて「杉山お前は俺の三輪の時に俺に構はないうで笛を吹いて居つたのでひどい目に遭つた」と怒つた、併し是はまうではないので、シテが笛を聞いて笛に合せて行くのが當り前である、笛が頭取で雛子方も笛を聞いてそれに合せることになつて居る、それで古市さんが聞いて「飯田君それは反對である、シテは笛の音を聞いて笛に合せるので舞に笛を合せるなんてそんなことが出来るものではない」と言ふと「そんな馬鹿なことはない」「いやそんな不見識なことを言ふな」「不見識でも何でもそんな理窟はない」と言つて飯田巽も非常に何腹の男で「古市生意氣なことを言ふな」「いや貴様は何も分らぬのだ」「分らぬとは何だ貴様こそ分らぬ」と言つて二人が喧嘩になつて盃を振り上げた。それで今夜は大切な時であるからと私が仲に入つて納めた。その時古市さんが私に向つて「本間黒かつた、分らぬ者に喧嘩を吹っ掛けた俺が悪かつた、分らぬ人間の云ふこ

とを聞いて、分らぬ奴だと思つたら黙つて居れば好かつた」と言つて居つた。それからもう一つは、同氣俱樂部といふのが前からあつたが建築を仕直して舞能舞臺を拵へたが、西郷さん、土方さんなどがその俱樂部の總裁であつたが、次が蜂須智さんが總裁になられ、古市さんが理事長のやうなものになつた。或時素人で善太夫、踊、能樂を混合してやるといふことになり、蜂須智さんが羽衣、古市さんが望月をやることになつた、その時私は古市さんから頼まれて揚幕を拵へて寄附した、所が大倉喜八郎さんは一中節が得意で、藤間を呼んで踊らせる、柳原さんは善太夫で何とか云ふ三味線ミヅマヅリ彈を呼んで来る、古市さんと蜂須智さんは能で各々藝人を連れて來ることになつたのであるが、能樂師の癖として、他の俗曲と一緒ににはやらぬといふことになり、出ないといふことになつた、それで古市さんは非常に心配されて、本間どうしたものだらう、何でも聞くと大鼓と小鼓が非常に反對で結局囃子方は出ないといふことになつた、それで私が交渉に行つて賣生九郎に會つて話した、所が當時に於いて賣生九郎と梅若實の言ふことを聽かないものは、能樂師にはなれないといふ位の勢力がある時分であるから、その二人が中心となつてやるのでその賣生九郎が

言ふのであるから一も二もない、皆應じてしまった、それで私は先牛に出ますよと言つた所が、あの方は何時でも、怒つたやうな顔の方ですが、それが笑ひ續けに笑つて喜んで居られた、そして羽二重を一枚買つて来て、今日は何より有難い、これを賣生九郎に差上げて呉れと言ふので私が持つて行つた、すると賣生九郎は、それぢやこれを數く代りに神田川に行つてお二人に御馳走しやうといふことで、鰻の御馳走になつたことがあります。

この間未亡人に會つた時未亡人の曰く、眞野さんにもお話したのですが、自分が死んだ後傳訃のことを言つて来るかも知れぬが、辭退するやうにといふことであつたので、辭退し續けたのですが、折角皆さんがさうやつて下さるのですから、非常に有難いと思つてお受けしたやうな次第であるといふことでした、どういふ譯でそんなことを言つたかと言ふと、物を一直線にやつて成功した人でないと、人間でないやうに言はれる、西洋でも或一つのことをずっと續けて成功した人を偉いとして居る、所が自分は時期が悪かつた爲に大學にも關係し學者の仲間にもなり、又土木事業にも關係するし、又書院にも出るといふやうに何でも屋になつてしまつた、これは實に恥入る次第で、或一つ

のことを事業としてそれが國の爲めになつたといふものは殊つて居ないから、私の傳記のことは辭退せよと言はれたといふことである。私はそれを聞いて實に意志の堅い人であつたと思ふ、能樂に就いても素人としては先づ隨一の方で玄人の人までも感服する所まで行つて居られたが、それもこの堅固な意志があつたからであらうと思ひます。この間三井さんの所に行つて、何か古市さんに付てお話がありませんかと申しますと、私の一番驚いたのは實の所で、古市さんが立つて稽古したのを見たことがない。此處はどうです、あそこはどうです。此處で右へ廻る時に困りますがと言ふ、それなら斯ういふやうに足を引くと好い、成程それで私もやり易くなりますといふ調子で、あゝなつたら能も樂だらうと感じたといふことでした。稽古はしないで此處は斯う、あそこは斯うと聴くだけであつたといふのも、そこまで行つたのも意志の力であつたと思ひます。

眞野巫長 古市さんが土木局を罷められる時土木局の者が何か古市さんに進物をしやうと云ふことになり、能がお好きだから、翁の繪を書いた屏風を差上げることになつた、ところが畫家が翁を見たことがないから見せて呉れといふので、古市さんの翁、私の千歳、丹羽君の三番

叟で翁を演ずることになつた、三博士の翁の能は前にも後にもあるまいといふことでした、それを書家がスケッチして描いたものであります。その屏風が古市家にある筈です。それから先程お話があつたが私が千歳をする時も、矢張り別火でした、稽古に行くと別の間に通されたものです、鼓打ちも同様で、是は頭取の所へ一週間も前から泊りこむのであつたさうです、この頃は三日位になつたとかいふことです、他の能をする人は好いが、翁の關係の者は別の間に通されて、別火です、それから一週間位の間は葬式などに行くことは出来ない、なかなかやかましいものだ、二度とやるのは大變だと感じました。

翁の時にやり損ふとその年は仕合せがないと云ふので、非常に重きを置きます。それから舞知鳥のことに付いて少し訂正したいのですが、本間さんのお話程ではなかつた、お話のやうに久米さんの大鼓と古市さんの小鼓が衝突した、この翺りは囃子にはしないのですが、素人だから宜いだらうと云ふのでお許しを得ました、それで翺りがやりたくて堪らぬ、そこで古市博士と久米博士と三人で舞知鳥をやらうといふことになつたのであります。然るに大鼓小鼓がごちや々々になつた併し舞臺を引込みはしなかつたのですが、御兩人とも是はいかぬと言

つて打つことをやめてしまった、それで本間さんのお話しの通り私は立往生になつた、肝腎の所に来て鼓ががちや々々々になつたので、萬三郎さんも六郎さんも地に出て居つたが翔りの半ばだから仕方がない、やがて不思議なことに私は何といふ考もなく翔りの終りの拍子を踏んだ、すると直ちに地が「親は空にて血の涙を」と謠ひ出してくれたのでまあ濟んだのですが、濟むと直ぐ待ち構へたやうに、古市博士と久米博士は奥へ飛び込んでしまった、鼓は持つて入たが弱は放つほり出した儘で、後見に出て居られた織之丞先生が弱を捻拾つて歩く、見物人は一同にどつと笑ふといふ始末であつた。それから古市さんの稽古の時のお話があつたが、私は丁度古市博士のお稽古の時に出會つたことがあるが、古市さんは大抵は疊の上で、無論舞臺を考へながら、あそこはどう、此處はどうといふ風に教はつて、必要な所だけはやつて見ますからと大事な所だけは舞に出てやられる、十中の八九までは坐つて居て口で習つて居る、併し本當に能をやる前には一度は實際にやられました、私のやうな稽古はしない、大體は口の稽古で大事な所だけは立たれたといふ風です。

それから時々は痾癩を起されるといふ話で面白いお話があります。九

州の二日市太宰府の天神様の舞臺でやつた時、御承知の通り流儀に依つて違ふ所でありますから、前に狂言とちやんと打合せをして、此處の所は斯ういふ風に言つて呉れと相談をして置いたのに、狂言がその打合せにそむいたので、癪に障つたから「先づ畏つたると申し候へ」と長刀を非常に強くドンと突いた、すると能が濟んでから見物の或人が「あなたの御流儀では大層長刀を強く突きますね」と言はれて大に弱られたといふことです。

名井 能は何ですか。

眞野 巫長 鉢木です。それから春日龍神の調が得意であつたが、是は大鼓を叩いては半から誦耐ひ出すので、非常に六ヶ敷いのださうです。或時何の所であつたか私は存じませんが太鼓が打ち方を間違へた、その時古市博士はウンと袋へて誦耐の力ではつまなかつたので、梅若實から大變褒められ、太鼓方も非常に熟練してあやまつたといふことです。さういふ方面から言ふと。古市さんの誦といふものは非常に偉いもので、其の上に素人で、鼓や太鼓の出来る方はないと思ひます。

高橋 囃子を知つて居つた所は素人離れがして居ります。

本間 小鼓はよく打ちました、太鼓も少しやりました。

眞野座長 是は是非書き碁して置きたいことですが、亡くなられる時、萬三郎、鐵之丞、六郎が集まつて、お別れの謠をやりました、萬三郎が江口、鐵之丞が融。

名井 萬三郎が融です。

松田 この間瀬川君に聞いた話では兩方やつたといふことです。

名井 私の聞いたのは、前日に鐵之丞が来て六郎はあの時來なかつた翌日來たのは萬三郎です。

松田 六郎はお葬式が済んでから来て江口をやつた、これは瀬川君から聞いたのです。

名井 葬式の日にも六郎は來なかつた。

眞野座長 棺に入れる時に舞臺に出るやうに、能の装束を著けて、又日頃好きであつた囃も入れたといふことです。實先生が亡くなられた時には親戚やお弟子達で棺を皆で擔いで舞臺を一巡りした、さういふことを古市さんは知つて居られて言ひ遣されたのではないかと思ひます
高橋 古市さんの傳記を書く時には、能樂に就ては、うんと詳しく書かなければならぬ、大禮服を着て棺に入らずに、能の姿でといふ程、此方に精神が籠つて居られたのですから。

眞野屋長 もう一つ古市さんのお話があります、古市さんが盛久をやつた時經文がなかつた、入れるのを忘れたのであらう、探してもない、それで~~後~~その時^{古市}甫さんは、ワキ即ち相手が經を貰ひに来て手を出されたら、どうしやうかと困られた。その時寶生新がワキであつたが早くも經のないことをさとして、それで新が手を出さずに拜んでしまつた。それでもう經の必要がなくなつた、うまくやるものだと感じして括されたことがあります。

それから果も古市さんのお話ですが、鐵之丞先生が三井寺の能で、鐘の紐を引張つても出て來ない、ひどく引張るともう能ではなくなる、でちよつとやつて見て行かなかつたから、扇を出してそれでしごいたのですると紐が解けたといふことですが、あゝいふ型が別の型になるといふことで、これも古市さんの話です。さういふことは澤山知つて居られたやうです。

丹羽 高橋さんのお話の先代寶の千歳の話は私は古市さんから直接聞いた、それで古市さんあなたはおやりになる時には別火で潔齋なさいますかと書ふと、やるといふことで、斯ういふ話を聞いて居るから、俺はやつて居るといふことで、高橋さんのお話しの通りに承りました、

もう一つは地方によく御出張になつたが、地方には謠の上手な人が居られないので困られたと思ひます。獨吟仕舞といふのをやられた。これは何番位作られたか、私は實盛、鉢ノ木といふやうなものは拜見したが、全部で十番位あるのぢやないかと思ふ。

眞野座長 そんなにはない。

丹羽 田舎の下手な謠では駄目だからといふので考へ出されたものでせう。他の所々~~々々~~を謠つて舞ふのです。實盛で云へばトメの所で止めてしまふ。

本間 京釜鐵道の總裁の時に大連で實盛を一人で謠つて舞ふたが、實に立派なものであつた。

名井 札幌では何でしたか。

丹羽 實盛です、その獨吟で舞ふと云ふものを實にお話になつた、それは良い工夫です。田舎に行つておやりになるには、大變結構ですと言つたと話されたのを聞いて居る、

眞野座長 四つ五つある。

高橋 これは工夫すると面白いですね。

本間 それから、申し落したがつい最近二三年前ですが、どうも梅若

と各派とが離別して居るものは面白くないから一致させたいと考へてそれには人格の人を集めんければならぬと思つて、古市さんを訪ねて實の功績といふものは大であるから一つの流儀を拵へてやつても好いと思ふ。それで私は梅若流を樹立することを主張であるが、あなたは賛成して呉れるかと書ふと、如何にも賛成する、相棒は誰にするかといふので、三井元之助さんに頼んだから官からうといふことになり、三井さんの所に行くと、早速賛成してくれた。それから三人でぼつぼつやつたが、私ばかりではいかぬから、三輪善兵衛氏なども入つて、この三人を主としてやつて來た、そして大體纏り掛つて、條件までも書き出して好い工合になつた。所が松平伯が能樂協會の會長として、古市、三井、三輪に會ふから紹介せよといふことであつた、それで申上げると、それは好い、俺は實の功績をずつと初めから終りまで、松平伯に申上げる積りだといふことを言はれたので、それではちよつと待つて下さい。どう云ふ譯かと書ふので、誰しも實の功績は知つて居るが、それを言ふと少し困る、皆が融和せんければ發達せんといふことを説いて居るのに、それを言はふと藪蛇になると言つた。それから二三日過ぎて、松平伯との會見になつて、その席に於いて、實

の功績は大であるが、本間が書ふなど云ふから、書はずに居ると言つた、でその時は私は始終呼び付けられ、又自身寶生の事務所に出て来て、一生懸命であつたが、土壇場になつて支障が出来て、駄目になつたが、これが古市さんの能樂に對する最後の御熱力であつた。兎に角古市さんのことが一番詳しく分るのは實の日記帳です、あれを高橋さんの御熱力で見せて貰ふと好い。

高橋 六郎の肚の内は私にはよく分つて居るが、勿論見せもするし、殊に古市さんに對しては別して好感を持つて居られるから、勿論手引致します。それから古市さんの寫眞とか舞姿とかいふやうなものは有らん限り集めて、それを一番初めに一緒にするのぢやなく、その關係の記事が出た所へ入れると好いです。別して能樂の方は姿や形を見ないと感じが出ない。

本間 屏風の寫眞も入れて欲しい。

名井 どなたか御聞きになつたでせうが、私は古市さんから、聞いたのですが、今の皇后陛下と思ひますが、葉山に古市さんが伺候する時大森さんに耳が遠いから一切お話はなさらぬやうに頼んだ、所が伺候すると、古市は能のことをよく知つて居ることを、御承知なものです。

から頼りにお話しなる、耳は聞えぬし、近くへは寄れないので、あんなに困ったことはないと言つて居りました。

本間 古市さんは亡くなられる時まで、能樂に付ては心配されて、一發團結して、發案展させて行かなければならぬと、心に掛けて居られて私が死ぬ前にお見舞に行つた時も、護へ聲で囃子方を第一何とかしなければならぬ、俺が死んだら、貴様の生きて居る内に何とか工夫して呉れと言はれた。尙ほこれは能の關係ではなく、家庭のことですが奥さんが二番目の娘さんを生まれた時、非常に産後が悪くて、その時に初めて宅が、今死ぬと犬死になるから何とかして助けたいと言つて呉れた、それが今でも有難くて忘れぬといふことでした、それから聞此の間も言つて居られたが、私共夫婦揃つて遊びに出たことは一遍もない、必ず一人は家に居て親を見て居た、私が出る時には宅が居る、二人で親を置いて出たといふことはない、ところが今の子供は、それが出来ぬと言つて居られた、成程古市さんといふ人は何も構はないやうな風の人であつたが、矢張り奥さんもよく出来て居るが、本人もよく出来て居たのだらうと思ふ。

眞野座長 今のお宅にはないが、前の本郷のお宅には敷舞臺があつて、

あそこで私は羽衣をやつたことがある、所が初めてのことですから狭い、そして端に寄り過ぎて、右に向くのに桂柱に觸つてはいかぬので右に廻ると、今日は右かと言ふので、桂柱に觸ると思つて、右に廻つたと言つたら、觸りはしないと書つて笑はれたことがある、それから古市さんが、舞の爲に笛の譜を誦つて居ると、お前は始終口で妙なことを書つて居るが、何を書つて居るのかとお母さんから言はれ、笛ですと言ふと、笛がそんなことを言ふものかと笑はれたことを古市さんから聞いた。

本間 公威はおかしくなつたのではないかと餘り熱心に譜をやつて居るものですから、言はれたといふことです。

加茂 古市先生は幼少の時から、能をやられたのですか。

高橋 二十代でせう。

加茂 藩公が能がお好きで、古市先生は御小姓で、仕舞をやつたといふやうなことも。本當でせうね。

高橋 本當でせう。

杉山 私間接に聞いた噂話ですが、晩年に鉢木を舞はれたことがある、ところが非常に出来が好くて、もう一度やつて欲しいと求められて

未だ身體がすっかり回復して居らないのに舞はれて、それが病氣に障つたといふことを聞いたが、眞偽は存じませんが。

眞野 眞野 古市さんの所に、本の名寄せの謠曲の上に點々を附けたのがある、鉢木などは幾つも附けてあるが、終りのものまで附けられたのか、どうか、知らぬが、能に依つては何度もやつて居られたことがよく分ると思ふ。

高橋 さういふ材料は面白いですね。

眞野 眞野 その星は多分、能を勧められた數だと思ふ、或ものは五つ、或ものは二つ位附けて居る。

本間 能に付ては成るべく詳しいものが欲しいから、探して下さいと奥さんに頼んで置いた、探して置きませうと言つて呉れました。

眞野 眞野 實から行つて居る手紙なども好いですね。

高橋 梅若の方へ行つて居る古市さんの手紙もあります。

本間 能樂といふものが多少國の禱樂といふやうなものになつて居つたものですから、これに補助金を得やうぢやないかといふので、國家會に請願した、その金額は本當は六十萬圓位欲しいが、二十萬圓にして補助金を貰はうと云ふので、古市、眞野さんが福原といふ専門學務局

長に話して段々話を進めて行つて居ると、國會は解散になつた、そこで古市、眞野さんと我々の名義を以て全國の候補者に、今度能樂の方へ補助金を出すことに賛成するなら、能樂臺を演説場に貸し運動もするやう云つてやつたら、全國の議員候補者が過半賛成だといふことになつた。所が愈々能樂補助金が問題になつた時大岡育造が反對の一人あの人は義太夫の愛好者で、能樂が二十萬圓なら、義太夫は六十萬圓位補助して貰はなければ困ると云ふので、奥野一郎といふ者が頻りに演説したがどうもいかぬ、それでは建議案といふことにして、それを可決した、併し建議案では金は貰へない、こつちは法律案としたかつた、次に明治四十四年に古市さんと眞野さんが助力して呉れ、時の文部大臣の長谷場さんに頼み、代議士の方からは鳩山和夫、菊池侃二、森田勇次郎、島田三郎といふやうな連中が賛成して呉れ、國庫から、邦樂調査費として三萬圓だけ貰つた、で能樂もその中から貰ふことになつたが、丁度それを決定する時福原さんが病氣か何かで出ない時に終に能樂のことを落してしまつた。それから私は長谷場さんの所に行き、菊池と立會の上行つて怒つた、骨を折らせて、脱けたといふのはどういふ譯かといふやうなことで怒つた、所が古市さん、眞野さ

ん二人が色々やつて呉れて、年に三千圓貰ふことになつた。そして委託教授といふことにして、音楽學材が五百圓あとの二千五百圓を能樂會が貰つて、雛子料といふものが出來て、それが存續して居る譯です。明治四十四年から今まで貰つて居るのですから大きなもので、是れは古市眞野兩氏の御骨折の賜ものです。

眞野座長 皆様どうも有難うございました。

午後二時四十五分 散會

「備考」

古市先生の父藤之進氏が姫路藩江戸邸御留守居役とあるは、祖父藤之進氏の誤り。又九代目團十郎が御蟲負であるは七代目團十郎なるべしとの事。

古市先生入棺の時、能舞台に出るやう然に能装束を着けたとあるも、紋附の羽織、袴であつた事は、嗣子六三氏の實話である。